科学の視点で地域の魅力発信
～ただの住宅地から愛着のある地元へ～

多摩六都科学館　主任研究員　原　　朋子

1．はじめに

多摩六都科学館は、東京都の北多摩に位置する公立の総合科学館である。都心から鉄道で１時間圏内のベッドタウンなので、観光誘致的な地域振興は求められていないが、科学館周辺地域の住民の多くが他の地域からここに移り住んで１、２代目の「他に地元がある」層のため、地域が抱える問題に我がこととして向き合ってもらいにくいといった課題がある。

その対策として、科学館で企画する展示やプログラムでは周辺地域の特性を意識的に関連づけて発信するようにしている。科学ならではのニュートラルな視点から地域資源の掘り起こしや価値づけをすることで、とりたてて特徴が無い住宅街にもユニークな価値あるものが存在することを伝え、それにより住む人たちの地域への愛着と誇りを高められる可能性について紹介する。

2．多摩六都科学館について　～総合科学館から地域科学館へ～

多摩六都科学館は、東京都の多摩北部地域の５市（小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市。以下、圏域と表記）によって設置・運営されている総合科学館である。複数の自治体による公共施設の設立・運営は、ごみ処理場や病院などでは見られるが、教育関連施設としては他に例を見ない。

世界一に認定された投影機を備えた大型プラネタリムドームと５つのテーマの常設展示室とを持ち、昨年度は年間約 25 万人の来館者を迎えた。「Do! サイエンス！」を合言葉に、実感を伴った理解によって科学的な見方や考え方が養われるよう、体験型の展示物に加え、毎日なにかしら体験できる観察・実験・工作プログラム、プラネタリウムの生解説等を行っている。

多摩六都科学館外観

科学館の開館は平成６年（1994 年）。＜科学・技術による緑と生活の調和＞を基本コンセプトに、生活に関わる大小さまざまなレベルの科学を体験型の展示物で楽しみながら学ぶ施設として造られた。当時から地域の生涯学習施設としての期待はあったものの、展示での地域性の打ち出しは弱く、むしろ昔ながらの「科学技術の素

晴らしさ」を伝える展示の色合いが強かった。しかし、開館したころから世の中の景気がどんどん悪化し、圏域の中でも財政状況が厳しい市が出てきてしまった。国でも事業仕分けが行われるようになると、緊急性の低い施設への風当たりはますます強くなり、税負担をしている自治体・住民へ何を還元できるかを強く求められるようになった。

そのような中で、多摩六都圏域における科学館の使命を明確にし、管理運営の基本方針と事業の体系を表す中長期計画「多摩六都科学館基本計画」を策定することで、内外に科学館の役割・方向性を打ち出した。平成 16 年度（2004 年）に始まった第 1 次基本計画では、５つの基本理念を頭に置いた事業展開と事業評価制度による運営改善を軸に、リピーターの獲得、ボランティア制度をはじめとした市民参画のしくみづくりを進め、人気の高い企画展や展示室・プラネタリウムのリニューアルといった大イベントも相まって、一時は年間 10 万人を切るまでに落ちていた入館者数が 20 万人を超えるまでに V 字回復することができた。

★ 多摩六都科学館のめざすもの

● 5つの基本理念

1.科学と人間の調和を目指す
2.文化としての科学を追求する
3.専門性とエンジョイメントの両立を図る
4.地域コミュニティーの生涯学習拠点となる
5.徹底した利用者中心を追求する

（第１次基本計画にて策定し、第2次基本計画にて改訂）

第１次基本計画に書かれた基本理念

平成 26 年度（2014 年）から始まった第 2 次基本計画においては、多摩六都科学館が次に目指すこととして「圏域の人々や資源をつなぎ、身近な地域の価値に目を向け、多様な学び場を創造すること」「地域への誇りと愛着を生み出す場を作り出すこと」が挙げられている。単純に来館者増を目指すのではなく、科学を軸に科学館と圏域住民とで地域をつくることも使命となったのだ。

これは設立当初の“総合科学館”からより地域と密着した“地域科学館”へと舵を切ったことになるが、多摩六都科学館が基本計画の大きな軸の一つとして地域の核となることを打ち出した理由は、地域振興というよりも、地域の課題解決に住民の意識を向けることが狙いである。

３．地域への愛着を抱かせる必要性
～我がこととして考えてもらうために～

多摩六都圏域の特徴を一言で言えば「大都会でも田舎でもない」といったところである。

圏域５市の主要駅は、東京駅から地下鉄と私鉄（西武新宿線、西武池袋線）を乗り継いで 60 分程度のところに位置する。戦前までは畑作や養蚕が盛んな地域だったが、1960 年代の高度成長期に急激に人口が増え、ベッドタウン化が進んだ。現在の住民はその頃に戸建住宅や団地に引っ越してきた世代とその

多摩六都科学館を運営する５市（色がついている部分）

２・３代目や、ここ数年で大規模マンションや分譲住宅に入居してきた層が多くを占めている。

この地域を住まいに選んだ理由としてよく上げられるのは、「都心までのアクセスが良い」「自然が残っていて子育てに良い環境」「スーパー等生活に便利な環境が揃っている」といった利点だが、これは大都市の中心部からの通勤時間が同じ程度の鉄道沿線ならばどこにも共通してでてくるポイントで、この街ならではといった特徴が感じられていないということにもなる。

人はよく自分のホームグラウンドである場所を「地元」と表現し、その言葉には土地への愛着と心の拠り所であることが含まれているが、この「地元」という感覚は住んでいる年数との相関が強いという。逆を言うと、地域に住んで歴史の浅い人々にとって、その場所はまだ「地元」になっていない。圏域市民の多くにとっての「地元」が自分のふるさと・帰省する田舎を指しているとすると、今住んでいる地域は「一時的に住んでいるだけの場所」であり、思い入れはそれほど深くないと考えられる。その場合、地域が抱えている問題を「我がこと」として感じる度合いが低くなり、ひいては行政の施策や開発による環境変化への関心の低さとして現れるおそれがある。

圏域５市内では現在でも宅地開発などによる緑地減少や、雨水浸透の少なさに起因する低地の水害や川の水枯れといった問題を抱えている。市民の我がこと意識の低さが地方選での低い投票率や住民運動への無関心につながってしまうと、地域環境は悪化していく。また地域が備えていた条件が悪くなれば他の条件のいい地域に転出してしまう。市民に住んでいるところに愛着を持ってもらい、そこを「地元」と思ってもらうことは、開発の激しい都市部であるからこそ必要なアプローチであるとも言える。

ただ一方で、場所への思い入れは必ずしも年数という量だけで決まるわけではなく、感情という質的なものによってももたらされる。例えば、ふるさとへの愛着度・自慢度の都道府県別ランキングでは、上位に沖縄・北海道・京都が上がっている。この結果に投票者が住んでいる年数も当然関係しているだろうが、豊かな自然環境、美味しい食事・歴史の感じられる街並みといった他の場所に勝る魅力的な要素を備えていることは、居住年数の浅い層に対しても、地元への強い思い入れを生み出す要素となるだろう。さらにその要素が他の地域の人々からも高く評価されていれば、自慢度の高さとしてあらわれると考えられる。というのも、この３つのエリアは、旅行で行ってみたい場所のランキングでも上位に位置する、魅力を広く認められている地域だからだ。

４．科学の視点で地域を評価　～ここは価値ある場所～

多くの自治体に郷土史を伝える施設があると思うが、その土地の歴史や遺されてきたものはその地に根のない人にとっては興味を持ちづらいものである。しかし、科学の視点でとらえた地形や環境の特徴といった情報は普遍性が高く、地域に根のない人にも興味を持って受け入れられやすい。

多摩六都科学館で取り組んでいるのは、圏域市民の地元意識を向上させる手段として、地域の資源を「科学」の視点から客観的に評価し、その価値を発信することである。

「科学ならでは」の視点の有効性に気づいたのは、間接的に指定管理者制度の導入がきっかけであった。それまで科学館運営の中枢は圏域５市から派遣された市の職員と科学館のプロパー職員だったが、指定管理者制度の導入により、それが民間企業（（株）乃村工藝社）へと移った。ある意味、圏域との利害関係が強い地域に根ざした人々から、特に根のない人々へとその割合が大きくシフトしたことで、外部からの視点が加わり、地域の特性を客観的に捉えられやすくなったのだ。

指定管理者の導入と時を同じくして、プラネタリウムと展示室のリニューアルが行われたことも大きかった。リニューアルのプランニングには指定管理化する以前からの教育普及担当スタッフも加わったため、地域に根のある人々がいいと思うところ、外から来た人々が評価するところが入りまじり、そのことで従来とは違う角度から地域を捉える視点が生まれてきた。そんな中、ひとつ大きな軸となったのが、地学がテーマの展示室「地球の部屋」である。展示室中央部を地質学入門と銘打って一般的な地学の基礎知識を学ぶエリアに、周辺部を圏域を中心とした多摩の地質を紹介するエリアにし、「地球規模の活動の結果を地域で確かめ、地域の地質から地球規模の活動を考える」という構成を打ち出した。ローカルな地域の環境が、さらに大きな科学の視点からも語られることで、普遍性を持ったものとなった（このコンセプトは館全体で共有され、科学館のホームページで館長によって「地域から世界を観る・世界から地域を観る」と紹介されている）。これをきっかけに、他のテーマの展示室も地域環境や地域の専門機関と連携した発信を意識した展示構成となった。

５．地域の魅力・持っている価値を伝える活動

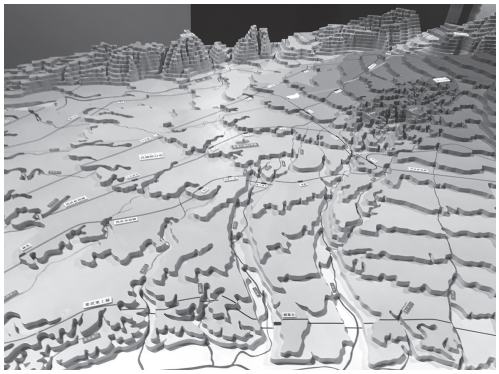
実際の地域の価値を伝える取り組みの一例を紹介する。

１）武蔵野台地の地形からわかること

圏域の人々が展示室を訪れた際、いつも見慣れていてそれほど価値を感じていない自分の住む地域の地形や植生が、実は科学の視点で見ると地域独特の貴重なものであること知り、驚くことが多い。

例えば、「地球の部屋」では関東ローム層を表した柱や地形模型等で地域の地形の特徴を伝えている。多摩六都科学館は武蔵野台地の中央に位置し、地面の下は関東ローム層という箱根・富士山の火山灰が変質してできた赤い粘土質の土が厚く積もり、その下には武蔵野礫層というかつて多摩川が運んできた礫が堆積し層がある。この地域に降った雨はローム層にしみ込んでしまうため、台地の中央には河川が見られない。一方、ローム層を抜けて礫層に届き地下水となった水の一部は、礫層が地表にあらわれる標高 50m 付近で湧水となって地表に流れだし、荒川水系へつながる小さな川となる。圏域５市の内、南に位置する小平・西

東京の立体地形模型全域


ほぼ平らな武蔵野台地中央部と小さな川が荒川に流れる地形の差がはっきりわかる（手前が北側）

東京市は台地の真中の平らな地形、北に位置する東村山・清瀬・東久留米市は湧水と小さな川がたくさん見られる谷間が多い地形と、圏域５市の範囲内で武蔵野台地に特徴的な地形の両方が存在する。教科書で習うことが、自分が気軽に行ける場所で実際に確かめられるのだ。

科学館で説明していると、圏域北部の人は自転車で10分走ってもずっと真っ平らな地形があることに驚き、南部の人は住宅地の真中に川遊びができる湧水を源流としたきれいな川があることに驚く。自分にとって当たり前の風景を少し距離をとって俯瞰することで、その特徴や豊かさへの気付きが生まれ、さらに引いて見ると、都内でこのような環境があることは大変恵まれているのだということがわかる。科学館では圏域を中心とした立体地形模型でこの説明をするが、科学の視点で東京を見渡すことで、圏域がユニークな地形を擁していることに気づく人が多い。そういったとき、多くの人が「今度じっくり見てみます」という感想を述べる。科学的な説明が、自分の住む場所を改めて評価して見てみようという興味を持たせるきっかけとなるのだ。

２）大学・研究機関・企業との連携

多摩エリアは広い土地が確保しやすいことから、大学や公立・民間の研究機関が点在している。ここ数年では、特に国公立の大学や研究機関が拠点としている地域との連携を使命として掲げられるようになったことが追い風となって、多摩六都科学館でも多くの連携事業を行えるようになり、それが地域の価値を伝えることにもつながっている。

例をあげると、当館では大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構（KEK）と東京大学宇宙線研究所（ICRR）と協力協定を結んでいるが、東京郊外の小さな科学館がこのような最先端研究機関と関係を持てた理由の一つは、この両機関のもととなった東京大学原子核研究所が圏域５市の一つである西東京市（当時は田無市）にあったためである。ICRRとの協力協定締結記念講演会ではノーベル賞受賞直前の梶田隆章博士に登壇いただいたが、これは博士が現役最前線で研究にいそしんだ思い入れある場所であったことが大きく影響している。ノーベル賞科学者を４人も輩出した研究所が圏域にあった

宇宙線研究所との協力協定締結記念講演会「宇宙線で探る世界～科学の芽を育んだ田無～」

ことは意外と知られておらず、科学館での講演会や展示での紹介を通じて、ノーベル賞級の研究が自分の近くの場所で行われていたこと、その先生方が今もその地に思い入れがあることは「地元の自慢できることのひとつ」なのだと受け止められるだろう。

他にも東京スカイツリーの施工をした(株)大林組の技術研究所（清瀬市）や釣り道具で有名なDAIWA（東久留米市　本社名グローブライド(株)）の本社といった大企業が、地域の子どもたちのためにと施設内の見学会や釣り教室の開催などに協力してくれた。参加した子どもたちは、身近な所で最先端の技術・素材が生み出されていることの意外性に驚き、同時に誇りも感じていたようだった。

6．地域の価値あるものを見つける力

圏域を走る西武池袋線を打ち出したプラネタリウム番組

今まで上げてきた例を見ると、たまたま恵まれた場所だからできたことではないか、と思われるかもしれない。しかし、これらの財産ともいえる地域資源は、ごく近隣や古くから住んでいる人以外にはあまり知られていなかったものがほとんどである。これらの地域が潜在的に持っていた魅力は、あえてスポットをあてなければ多くの人が気づかないままだった。また、それを客観的に価値づけることしなければ、知っていてもその価値の大きさをわからなかった。多摩六都科学館は自然史系博物館のような標本収集や調査活動をする力は弱いが、地域資源を掘り起こし、それを科学の視点で価値づけて、展示やプログラムで発信するという形での地域貢献はできる。始まりは地学・生物の比較的地域性を持たせやすい分野からだったが、それが研究所等のつながりを生かして理工系の分野でも展開された。さらには地域性を打ち出しにくいプラネタリウムでも、「星を見に行こう～西武鉄道星空の旅～」というタイトルで都心から郊外に至る沿線の星空を再現して星空観察のコツを紹介する番組や、圏域で発掘された縄文遺跡にちなんで「5千年前にタイムスリップ！縄文人が見た『したのやムラ』の星空」と大昔のこの地域の星空を再現するなど、この地域ならではのコンテンツが生み出されてきている。地域を評価する取り組みは、科学館のスタッフの意識も大きく変えることにつながった。

7．これからの課題

人は自分の持っているものの価値を他の人から認めてもらうと、よりその価値を実感できるようになる。多摩六都科学館の利用者の半分以上は圏域以外の地域からやってきている。つま

東久留米市を流れる落合川の観察会
地域の方々から川辺の動植物や川での遊び方を教えてもらう

り、科学館で紹介している地域の価値は、圏域市民だけでなく他の多摩エリアにも、さらには都内全域や東京隣接の地域にも発信していることになる。その人たちに、多摩六都圏域がただの住宅地に見えても実はとても魅力のある場所なのだと高く評価されれば、何の特徴もないと感じていた市民にも今住んでいる場所へ愛着が生まれる可能性がある。圏域内外問わず、まずは多くの人たちに魅力を伝え、その場所へ興味を持ってもらうためにも、地域性と普遍性のバランスを意識しながら発信を続けることが重要である。最後に、地域への愛着が強くなる要素として、地域の人々とのふれあいが大きな割合を占めるという。今回は字数を割けなかったが、圏域の自然環境の保全・再生や地域おこしには多くの市民グループが貢献していて、関わる人々は観察会などに快く協力してくれる。実際に地域の自然の変遷を見てきた人たちから直接話を聞くことで地域への愛着の気持ちも共有されれば、そこが自分も守っていくべき場所だと感じる心も生み出せるだろう。科学館としては、地域に強い愛着を持つ人々とのつながりを持つ機会をつくり、地域課題に我がこととして取り組む次世代の人材を育てることも使命である。

地域密着型の科学館として、市民にとって今住んでいる場所が人生における一時的な場所でなく、愛すべき「地元」となり、その良さを引き継ぐ・よりよくしていく力につながるような様々な活動を展開していきたい。